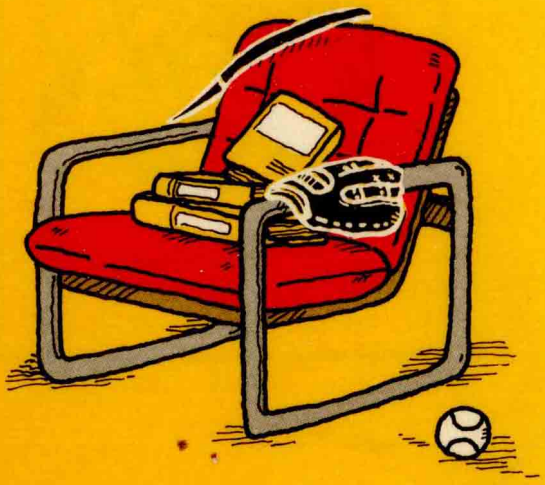
児童文学への誘い

岡田純也



創世記

児童文学への誘い

岡田純也

創世記

岡田純也（おかだじゅんや）
昭和十四年十二月十二日生れ。
京都女子大学助教授。京都教育大、奈良教育大に出講。
著書に「宮沢賢治 人と作品」「佐藤春夫 人と作品」（共に清水書院）
「近代日本児童文学史」「児童文学と読者」（共に大阪教育図書）
「子どもの文学の流れ」（いずみ書房）
「絵本の窓辺」（高文堂出版）等。
編著に「日本児童文学大系」（ほるぷ出版）等。
絵本に「おはなしえほん」「ちしきえほん」
（共に中央出版）等。
住所は大津市野郷原二―一八―六。

児童文学への誘い
昭和五八年五月十日初版発行
著者――岡田純也
装本――入江文子
イラスト――岡田達哉
発行者――細萱尚孝
発行所――株式会社 創世記
東京都世田谷区成城二―三―三〇
電話東京（〇三）四一七―二六六七
振替東京三―六二二四二
印刷・製本――凸版印刷株式会社
定価――一八〇〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©一九八三年 検印廃止

ISBN 4-88154-072-6 C1095 ¥1800E

児童文学への誘い

まえがき

児童文学の研究は、いわば新興領域の学問である。児童文学の学的研究を目指す児童文学の学会ができてから、未だ二〇年と経っていないのだから。

しかし、一般の関心の高まりもあって、その歴史の新しさはともかく、このところの児童文学研究の充実は、すこぶるめざましいと言えるようだ。

ひところ、児童文学という呼称そのものにアピール力が弱く、子どもの文学とか子どもの読物という、ごく日常的な表現におきかえての説明を強いられていたが、現在ではこの呼称も大いばりに通用している。

幼児教育学科ないし児童教育学科、あるいは国文学科で、児童文学及び関連領域としての絵本を卒業論文として選ぶ学生たちは、年々その数を増している。宮沢賢治、新美南吉を筆頭に、小川未明、坪田譲治、壺井栄等の、児童文学にあっては古典的と言える作家たちを取りあげているのである。もちろん、作家に限らず、これらの作家たちの作品論や、児童文学史、児童文学の本質論、ファンタジー等のジャンル論等々、かなり幅広くテーマを選んでいるようだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

但し、ごく最近の傾向としては、最も新しいところに属する現代の児童文学作家やその作品を研究対象とすることの多い点が着目される。

今の子どもたちを常に目配りしている児童文学にあって、その研究も現実機能的な側面をある程度尊重すべきというところか。

ところで、何と言っても児童文学領域の主役は、読者の子どもたちである。しかし、現在まで、十分に子どもの読者についての考究はなされてはいない。

作家、作品の研究、児童文学史ないし児童思潮史、そしてジャンル論等は、大いに豊かな幅と、深みを獲得してはいるものの、いわゆる児童読者論は、関心の高まりとはずれをもって、研究と言うべきものを多く持ってはいない。

子ども読者が何を読んだか、あるいは何を好んでいるかについては、図書館の児童室や文庫、あるいは教育の現場から、数多く報告されてはいる。

しかし、どのように読まれたか、ないしなぜ好まれるかという、子どもの読者の内奥を透視するような研究となると、やはり貧弱としか言いようがない。

とまれ、私自身の研究の観点は、実はこの弱少の部分にそそがれていると言えるのだが、果して本書の論考に、それが実現できているかどうか。

各セクションは、それぞれ異なった章題をつけたものの、ここに収めた全ての文章が、児童読者論を模索する線上にあることをことわっておきたい。

目次

まえがき……2

Ⅰ 児童読者論考……7

児童文学における価値について……8
児童読者論の視覚……21
児童文学と読者論……28
現代少女小説の魅力と反魅力……38
未知の世界への接点……47
読者にとってのアダルト・ファンタジーメモ……61
現代の幼年童話……71

Ⅱ 絵本覚え書……83

絵本前吏……84
絵本読者論覚え書……96
絵本における人物関係論の試み……102

Ⅲ 作家と作品 111

現代児童文学作家論……112
現代作家と児童文学……126
明治・大正、マーク・トウェーン翻訳雑感……136
マザーグースの日本における研究紹介の足跡……141
「風の中の子供」のことなど……146
「ドリトル先生アフリカゆき」を中心に……151
準創造のやさしさ……161
譲治童話の子どもたち……166
ユーモア作家サトウハチロー……173

Ⅳ 児童文学とメディア 175

子どもの本と出版社……176
児童書は何処へ？……188
テレビの彼方へ……192
テレビの後方をみつめる目……199

V 子どもの周辺

児童文学の中の子ども集団……206
仲間外れ……209
蔵書印……211
鏡……212
ある卒業論文……214
親ばなれのむずかしさ……217
子ども・本・私……220
中学生の手紙……225
あとがき……232

I

児童読者論考

児童文学における価値について

〝トム・ソーヤー〟と〝寒そうや〟

〝おそるおそる〟をおそろいの靴と理解した幼児がいた。

ほとんどの幼児たちが、同じ音からおそろしいと連想したし、一連の文脈的経験からそっと歩くとかそっとのぞくとか、アナロジー的に認識した中で、この幼児の想像は変っていた。〝おそ〟の同音と、二度のリピーティングがおそろいの靴をイメージさせたのである。

幼児の言語発達を根底にした幼児絵本のボキャブラリーにも、反応調査を試みてみると、このような個人差によって、まちまちな理解をひき起す状況が数多く見られる。

〝せっけいず〟を、音の類似からせいけつやせっけんと把握するといった例を挙げていくと数限りない。

〝トム・ソーヤー〟と聞いて、なにか可哀想な子どもと性格づけた場合などは、その典型だろう。つまり、〝寒そうや〟（サム・ソーヤー）と概念化したのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

音への敏感な反応、そしてそこからさまざまなヴァリエーション的理解を喚起する。〝寒そうや〟には、ある程度の普遍性を受けとめることができるが、関東ではこうした方言からくる連想は期待できないし、やはり、この種の例はほとんど個人的レベルの問題と言ってよいかもしれない。随分とアナーキーなのである。

言語の概念把握と音の関係を見ただけでこうなのだから、子どもたちの喜ぶ物語の文学的基準とは言っても、そう簡単に法則性を語るわけにはいかないようだ。

そこで、これまで子どもたちに愛されてきた絵本や幼年童話や少年少女小説をとおして、法則性のようなものの発見に努めようということになる。

『子どもと文学』と「文学価値論」

ところで、児童文学の法則性についての追求に重要な役割を担った、あるいは参考となるものと言えば、何と言っても石井桃子、渡辺茂男等『子どもと文学』（昭35）に明快に示された幼年童話の基準であり、古くは大正期に松村武男等の童話論にある価値基準であろう。そして、児童文学ではないが、より現代に近い時期に文学価値の相対性について論じた桑原武夫他の『文学理論の研究』（昭28）中の「文学における価値」は見過すことのできない報告であった。

それぞれ問題意識やその対象は違ってはいても、読者との深い関連の中で、言語芸術の価値基準を追い求めようとする姿勢に共通していた。

昔話に読者を魅了する幼年童話の基準をみた『子どもと文学』は、テーマ、プロット、人物の描写、会話、文体について、実に単純化した論理をみせてくれた。

テーマ　目に見えるように。年齢にふさわしく。

プロット　起伏ある事件の連続を時間に従って。発端での紹介、展開での物語の本体の叙述、結末での満足感。

人物の描写　人物の性格は行動と会話で。

会　　話　人物の性格、物語の進展をしめす役割。

文　　体　素材に適した文体。

このように、主として幼年の子どもの読者の理解と喜びにみあった幼年童話の特質であり基準を呈示したのである。技術主義的と自から記しているように、子どもに密着した児童文学理論の構築をという運動性を内在させていたための誇張、単純化であった。ところで、同じように昔話を土台とした松村武雄の『童話及児童の研究』(大11)ではほぼ主旨を同じくしながら、より緻密にプロット論を展開していた。

発　端　簡明で共通的興味を内在させ、イメージ表象の入口。

本　幹　サスペンスに満ち、終結に向って漸層的に進展し、有機的統一を保つ。

大団円　驚愕的であり、物語の渦の中心を形成し、終末をむかえる。

結　論　休息と反省の余裕を提供。

そして更に、子どもの興味をひきつける要因として、生活感、熟知性ないし親密性、感覚的刺戟、韻律と反復、想像的要素、神秘的要素、驚異性、活動性、冒険的要素、滑稽的要素、誇張を挙げ、これらが既知と未知の経験の交錯や知的道徳的物質的美や子どもたちの心理生活の反映にいろどられ、より想像的に展開し、子どもたちの心を浄化して終ることが望ましいと論じていた。

このように『子どもと文学』も『童話及児童の研究』も、プロット論を中心に子ども読者の心理にたった物語の条件を述べていたのである。

更に、桑原武夫の「文学価値論」では、より具体的散文的に、一般の読者が価値あると認めた作品の要件を一七項目掲げている。

① 特定の時代の社会が反映されている。
② 人生に関する知識が供給される。
③ 人間がよく表現されている。
④ 他人の秘密をのぞき見る感じのある。
⑤ 人生や社会についての発見がある。
⑥ 人生いかに生くべきかが示されている。
⑦ 人生への意欲が増進される。
⑧ 作中人物への共感をおぼえる。
⑨ 言語表現が巧みである。

⑩ 自然描写の美しい。
⑪ 的確な表現が与えられる。
⑫ 魅力ある異性が描かれている。
⑬ 日常生活からの離脱が経験される。
⑭ 想像力が刺戟される。
⑮ ユーモアのある。
⑯ スリルとサスペンスのある。
⑰ 多様な生き方が同時に表現されている。

これは、世論調査によって得た結果であり、完全とは言えないにしても、一般の読者が文学（主として小説）に期待する条件をかなり的を射て列挙したものと言えるだろう。そして同時に、これらの条件をよしとする読者の心理的な分析をも試みており、それによると、Ⓐ適応　Ⓑ自己表現　Ⓒ知識　Ⓓ自我防衛、といった欲求のメカニズムに対応して、これらの条件が表現されたとしている。『子どもと文学』や『童話及児童の研究』では、幼ない読者を想定して、より抽象的な文芸上の方法が語られていたが、この「文学価値論」では、多様な作品にみあったより具体的なファクターが抽出されていた。一般人を対象としたものであり、すぐさま児童文学の読者にあてはまるとは思えないが、小学校高学年生以上の読者には共通する点が多いと考えてよいだろう。

高学年生も、ひたすら楽しみの快楽を追い求めているものの、その楽しみの欲求には深さへの熱い

希求が含まれている。その希求に際限はない。

『走れ！　白いオオカミ』など

M・エリスの『走れ！　白いオオカミ』（久米元一訳）は、原文を省略した訳の問題などもあって、手離しで優れた作品と語るわけにはいかないが、質的なレベルを保ちながら読者にとって痛快な物語であることに間違いはない。そこで、この作品を例にとって、前の文学価値論をあてがって考えてみよう。

まず、何と言っても、動物文学特有の人間の日常性とは違った次元の世界が魅力的である。もちろん、空想物語や歴史小説では、この要素はより強くなろう。ともあれ⑬の日常生活からの離脱が満喫できるわけだ。とりわけ、失われつつあるオオカミを題材としているだけに、この離脱は刺戟的でさえある。

ボクサー犬は歯をむきだし、ものすごいうなり声をあげた。しかしグレイは、ひと声もほえず、静かに『殺し』をはじめた。たったひとかみで、イヌの前足がくだけてしまい、イヌはどっとくずれおちた。オオカミのあごは、巨大な北アメリカ産トナカイの大腿骨をかみくだき、その中にあるうまい骨髄を食べることができる。その力強いあごが、ぐっとボクサー犬ののどに食いこんだ。グレイは、ぐいぐいと歯を食いこませていった。イヌののどから血がほとばしって、グレイの顔にかかった。

読者にとって非日常的な、惨酷な野性の生理は、一挙に読者をオオカミの世界の住人へと誘ってしまう。そしてこの冒頭の闘争をへて、主人公の白いオオカミグレイは、読者を道連れとして野性へと戻っていくのである。

『白いオオカミ』には、この種の表現は圧倒的に多く、別世界の生命の魅力が渦巻いている。そして同時に、この種の表現は⑪の適確性や、⑯のスリルとサスペンスのダイナミズム、更に⑧のグレイへの共感を併せ持っている。

『白いオオカミ』には、この強烈な野性の柱と、その野性の魅力のとりこになっている一人の少年の生きざまというもう一本の柱がある。

残った一つのみちは、ラセットがグレイをつれて、遠い北の国へ逃げることだ。ウィスコンシン州の北部には、このケルト・モーレンの森の数十倍も広い大森林があって、数十頭の野性のオオカミが、州の保護のもとに、自由に走りまわっているそうだ。つまり、野性のオオカミの楽園だ。（よし、なんとかしてグレイを、その北部の大森林までつれていってやろう。）ラセットは、かたく決心した。

捜索隊の人々と対比させながらの、ラセット少年のかたくなな決心とそれを実行する行動力は、まさに③の人間をよく表現しているに該るだろう。そして同時に②の人生に関する知識や⑤の人生についての発見や⑰の生き方の提示をも含んでいる。

そして、結末の「『やれやれ、これですっかりすんだ。』と思うと、急にからだじゅうの力がぬけて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.